

平成18年度 第1回武道研究会報告

剣道の国際普及

—第13回世界剣道選手権大会に出場して—

下川美佳*

1. はじめに

筆者は、平成18年12月8日に開催された第13回世界剣道選手権大会に日本代表として出場する荣誉に恵まれた。結果は、個人戦で3位入賞を果たしたが、この大会出場を通して様々なことを得ると同時に世界の剣道事情について学ぶことができた。

そこで、筆者が実体験し、感じたことについてまとめてみたいと考える。

また、このことは、今後、剣道を学び伝えていく際、その方向性を明確にする一助となると考えられる。

II. 剣道の国際普及の歴史

剣道が戦後、GHQにより活動を禁止されてから7年後（1952年）に全日本剣道連盟が結成され、活動を開始した。一般的には、ここから剣道の国際普及も始まったとされる。

1970年に国際剣道連盟（IKF）が結成され、この時、17の国と地域が加盟しており、第1回世界剣道選手権大会（以下、世界大会）が日本で行われた。これより世界大会は3年に1度開催され、今回で13回を数える。

2006年、国際剣道連盟（FIK 当時はなお IKF）は国際競技団体連合（GAISF）に加盟した。現在、FIK には、47の国と地域が加盟しており、確実に世界に普及していることが窺える。

表1. 世界剣道選手権大会の歴史

| | 開催年 | 開催国 | 男子団体 | 男子個人 | 女子団体 | 女子個人 |
|------|------|------|------|-------|-----------------|--|
| 第1回 | 1970 | 日本 | 日本 | 小林三留 | | |
| 第2回 | 1973 | アメリカ | 日本 | 桜木哲史 | | |
| 第3回 | 1976 | イギリス | 日本 | 横尾英治 | | |
| 第4回 | 1979 | 日本 | 日本 | 山田博徳 | | |
| 第5回 | 1982 | ブラジル | 日本 | 蒔田 実 | | |
| 第6回 | 1985 | フランス | 日本 | 香田郡秀 | | |
| 第7回 | 1988 | 韓国 | 日本 | 大城戸功 | | |
| 第8回 | 1991 | カナダ | 日本 | 武藤士津夫 | | |
| 第9回 | 1994 | フランス | 日本 | 高橋英明 | 韓国 ¹ | A.ホリベ ¹ |
| 第10回 | 1997 | 日本 | 日本 | 宮崎正裕 | 日本 | 高橋寿美 ² 木村美姫 ³ |
| 第11回 | 2000 | アメリカ | 日本 | 栄花直輝 | 日本 | 河野朋子 |
| 第12回 | 2003 | イギリス | 日本 | 佐藤博光 | 日本 | 馬場恵子 |
| 第13回 | 2006 | 台湾 | 韓国 | 北条将臣 | 日本 | 杉本早恵子 |
| 第14回 | 2009 | ブラジル | | | | |

(過去の月刊剣密などを参考に作成)

1：日本は不参加 2：二段以下の部 3：三段以上の部

*鹿屋体育大学伝統武道・スポーツ文化系

世界大会の歴史は、先にも述べたが、第1回大会は1970年に日本で開催され、男子団体戦・男子個人戦の2種目のみであった。その後、第9回(1994)フランス大会から女子団体戦・女子個人戦が加わり、4種目での開催となった。しかし、女子団体戦・女子個人戦ともに公式種目ではなく、第12回(2003年)イギリス大会から公式種目として認められた。(表1を参照)

Ⅲ. 第13回世界大会

1. 大会日程と結果

大会は、3日間の日程で行われ、過去最多の44の国と地域の参加があった。ここで国際大会としては特徴的と思われるのが、期間中に稽古会が催

されることである。他の種目、特にスポーツの大会で、このように大会期間中に他のチームとの交流を持ち、手の内を見せるようなことをするだろうか。これは、武道特有の考え方である、これはまさに、自他共に栄えるという精神であり、剣道が単なる競技種目ではなく日本の伝統武道であるということ深く再認識した。また、大会終了後も現地で大々的に昇段審査会が行われるなど、交流・普及の面にも力を注いでいることが窺えた。

2. 大会出場を通じて感じたこと

筆者は、この世界大会出場を通じて、驚きと憤りを感じた。

まず、大会運営上の特色であるが、開催国国歌吹奏や選手宣誓のない開幕式は異色であった。こ

| |
|----------------------------------|
| 12月8日 (1日目) |
| 開幕式 |
| 女子個人戦 |
| 参加人数: 94名 (各国あるいは地域から最大4名のエントリー) |
| 結果: 優勝: 日本 |
| 準優勝: 日本 |
| 3位: 日本・日本 |
| 女子団体戦 |
| 参加数: 21の国および地域 |
| 結果: 優勝: 日本 |
| 準優勝: 韓国 |
| 3位: ドイツ・カナダ |
| 親善稽古会 |
| 12月9日 (2日目) |
| 男子個人戦 |
| 参加数: 166名 (各国あるいは地域から最大4名のエントリー) |
| 結果: 優勝: 日本 |
| 準優勝: 日本 |
| 3位: 韓国・韓国 |
| 12月10日 (3日目) |
| 男子団体戦 |
| 参加数: 39の国および地域 |
| 結果: 優勝: 韓国 |
| 準優勝: アメリカ |
| 3位: 台湾・日本 |
| 閉幕式 |

図1. 第13回世界剣道選手権大会の日程・内容と結果

れらは、国対抗色の強さや勝利至上主義と一線を画し、武道としての大会運営を心がける為に、前回のイギリス大会から廃止された。また、女子個人・団体戦、男子個人戦、男子団体戦の終了後、それぞれ成績発表と表彰が行われたが、表彰台やメダル授与・国家吹奏・国旗掲揚はなく、賞状と記念品・賞品の竹刀が贈呈された。これらは、前々回のアメリカ大会から廃止されている。他の競技大会、特にオリンピックなどでは、金メダル云々と言われるが、剣道の世界大会には、メダル自体がないと知り、明らかに他の競技と路線そのものが異なると感じた。

次に、試合について述べてみたい。図1の結果をみてもわかるように、女子においては、日本と他の国および地域では、確実に力、レベルの差が感じられた。しかし、男子においては、日本が初めて優勝を逃すなど、それらに差はなく拮抗している。これについては、後に説明を加えたい。

先にも述べたように、男子団体戦においては、韓国が初優勝を飾った。しかし、優勝が決まり、全体の礼が終わる前に、会場内で肩を組み喜び騒ぐ姿に、武士道で重きを置かれる惻隱の情はなかった。剣道を学ぶものは、試合の勝敗に一喜一憂するのではなく、剣道を通じて、人間としての向上を目指し、相手に対する思いやりや感謝の気持ちを培うことが大切とされているため、韓国の姿は、私自身衝撃的であり、武道としての剣道の発展に課題が見られた。

3. 剣道の国際普及(親善交流と競技の側面から)

大会に出場し、剣道の世界大会には大きく2つの側面があると感じた。1つは、他のスポーツと同様のチャンピオンシップつまり、競技的側面(以下、競技性)。もう1つは、合同稽古会などの国際親善交流の場(以下、親善交流)という考え方である。図2は、2つの側面の比率を示しているが、正確な数値を出し作成したものではなく、大会出場での経験により作成した。参考程度に見てもらいたいと考える。

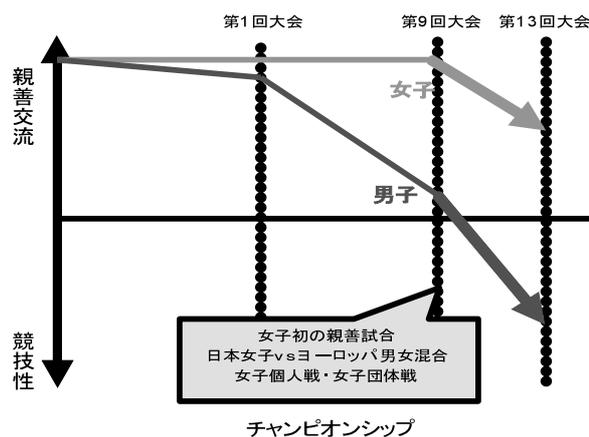


図2. 国際普及の親善交流と競技性の比較

縦軸は、親善交流と競技性の比率、横軸は、時間である。まず、国際普及の始まりは、男女とも、国際交流が主であった。普及にしたがって、第1回大会が開催され、競技性が見え始める。女子については、この時点では、まだ大会をできるほど、普及していなかった。男子は、回数を重ねるにつれ競技性が半数を占め、親善交流という考え方は、少なくなりつつある第9回大会より女子団体・個人が加わる。そして現在、男子では、競技性が前面にでて、親善交流という考え方はないに等しくなり、女子も男子ほどではないものの競技性が強くなっている。このように、本来の目的であろう2つの比率が崩れているのが現状であり、今回、日本選手団は稽古会に参加しなかったが、本来は日本選手団こそ率先して参加すべきであった。この現状を目の当たりにし、世界大会のあり方を考える1つの課題であると感じた。

4. 剣道KENDO国際普及の現状と課題

まず、『韓国による「剣道の起源」捏造』と『韓国コムドの普及』である。この問題は、国際剣道連盟のGAISFへの加盟により、世界に日本伝剣道が認められたことで、解決すると思われるが、今回の韓国優勝により再加熱する可能性はないとは言えないため、今後さらに注目を集める課題だと考える。

次に、剣道具などの用具不足の問題だが、現在

は、全日本剣道連盟（以下、全剣連）による中古剣道具の寄贈などにより対応している。

最後に、全剣連が、剣道はあくまでも「武道」としての方向性を示すと打ち出しているが、日本が今回、世界大会で敗れたことにより、今後はますます競技としての剣道が色濃くなると予想される。武道の持つ、人間教育としての特性を活かす為に、先にも述べたが、親善交流の最大の場である世界大会のあり方を見直し、本来の目的を再確認することが急務であると考えられる。

IV. まとめ

これまで、剣道の世界大会の現状と今後の課題について述べたが、現状と課題を把握し、さらに、「剣道の理念」や「剣道修練の心構え」そして、新たに制定をみた「剣道指導の心構え」を軸に、日本が指導性を発揮し、解決してこそ、剣道の本来の国際普及があると考えられる。

次回の世界大会は、2009年にブラジル・サンパウロ市での開催を予定しているが、この大会を盛大にそして無事迎えらることを心から願う。

参考文献

- 1) 福本修二・宮坂昌之『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 1994年5月号, 3~8頁。
- 2) 高橋英明・武井幸二・鍋山隆弘・砂田卓士・佐藤理恵・倉地富美恵・佐藤勇『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 1994年5月号, 9~11頁。
- 3) 武安義光『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 1994年5月号, 12~13頁。
- 4) 市川彦太郎・林邦夫・福本修二・松永政美・小沼宏至・市田市太郎『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 1997年5月号, 3~17頁。
- 5) 武安義光『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 1997年5月号, 22~23頁。
- 6) 西山泰弘・角正武・高橋英明・大塚真由美『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2000年5月号, 3~14頁。
- 7) 植原吉郎『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2000年5月号, 15頁。
- 8) 竹内淳『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2000年5月号, 16頁。
- 9) 武安義光『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2000年5月号, 18~19頁。
- 10) 『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2007年1月号, 3頁。
- 11) 武安義光『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2007年1月号, 4~5頁。
- 12) 『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2007年1月号, 6~11頁。
- 13) 武安義光『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2007年2月号, 4~5頁。
- 14) アレクサンダーベネット『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2007年2月号, 12~16頁。
- 15) 福本修二・真砂威・梯正治・清家宏一・金木悟・稲垣恵理『月刊剣窓』全日本剣道連盟, 2007年2月号, 21~25頁。
- 16) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 1994年6月号, 8~25頁。
- 17) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 1997年5月号, 8~34頁。
- 18) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 1997年6月号, 22~29頁。
- 19) 杉山融『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 1997年6月号, 32~35頁。
- 20) 平山信夫『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 1997年6月号, 36~39頁。
- 21) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2000年5月号, 8~28頁。
- 22) 井上義彦『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 29~31頁。
- 23) 佐藤勇『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 32~38頁。
- 24) 高橋英明『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2000年6月号, 30~37頁。
- 25) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2000年6月号, 38~41頁。
- 26) 平山信夫『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2000年6月号, 42~47頁。
- 27) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2003年9月号, 11~21頁。
- 28) 佐藤博光『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2003年9月号, 22~23頁。
- 29) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2003年9月号, 24~31頁。
- 30) 馬場恵子『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2003年9月号, 32~33頁。
- 31) 『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2003年9月号, 34~36頁。
- 32) 新里知佳野『剣道時代』体育とスポーツ出版社, 2003年9月号, 37~38頁。
- 33) 本多壮太郎・クレマシスカルシア・陳伊達・臼田

- 靖・アレクサンダーベネット・ミハエルモランチョ・高橋静『剣道時代』体育とスポーツ出版社，2003年9月号，39～45頁。
- 34) 小林伸郎『剣道時代』体育とスポーツ出版社，2003年9月号，46頁。
- 35) 吉成正大『剣道時代』体育とスポーツ出版社，2007年2月号，111～146頁。
- 36) 川崎治子「SPORTS クリック」『朝日新聞』朝日新聞，2006，12，26，21頁。
- 37) 全日本剣道連盟HP，全日本剣道連盟：<http://www.kendo.or.jp>

